Mary Shelley の中編小説 *Matilda* における近親相姦

池田　景子

序

Mary Shelley の中編小説 *Matilda* は処女作 *Frankenstein* に続く第二作めとして、1819 年秋に執筆された。本小説が扱うテーマは一見、第一作目と大きく異なる。*Frankenstein* が科学者による人間創造の物語であり、ゴシック小説の代表および SF 小説の原典のひとつと目されるのに対して、*Matilda* は父と娘の近親相姦をテーマとしている。Mary の夫でイギリス・ロマン派詩人の一人である Percy Bysshe Shelley も父と娘の近親相姦をテーマとした詩劇 *The Cenci* を 1819 年に執筆しており、批評家の Margaret Garret によると、マチルダの罪は「性的圧力をかけられた犠牲者」のものであり、*The Cenci* における、父親からの性的被害者、Beatrice と同様だという(55)。しかし、父と娘の間に肉体関係が発生している *The Cenci* とは異なり、*Matilda* は心理的葛藤のみを描き、父と娘は一線を越えない。そうすると、Mary は *Matilda* において、罪の意識と絶望感に苦しむ主人公を作品後半で連綿と描いてはいるが、このような主人公の絶望と罪の意識の描写には Mary 独自の意図がある可能性が高い。それにも拘わらず、先行研究は *Matilda* の近親相姦のテーマにおける独自性には踏み込んで議論をしてこなかった。本シンポジウムの考察では、*Matilda* の後半部における主人公の絶望の描写にこそ Mary が近親相姦のテーマを通して示そうとした、独自の問題意識が隠されているとして本作品の評価を試みる。父と娘の近親相姦のタブーに着眼し、Mary が *Matilda* で描いた近親相姦の内実を明らかにする。*Frankenstein* から *Matilda* へ引き継がれたテーマが深められていったありようを考察し、近親相姦のモチーフをめぐるイギリス・ロマン派の伝統の中に *Matilda* の位置づけることを試みる。

Godwin の批判

本作品は主人公 Matilda による手記という体裁が取られ、死期を迎えた Matilda が自分の人生を振り返り、両親の出会いと自身の出生から物語を始める。イタリア滞在中の Mary は本小説の原稿を 1820 年に、イギリスに向かう知人の Maria Gisborne に手渡し、Maria から Godwin に渡してもらう。しかし、原稿を受け取った Godwin は本作品を酷評する。確かに Godwin が指摘するように、本小説において主人公 Matilda と父親の間に肉体関係はなく、この点で彼女は近親相姦のタブーは破っていない。ゆえに、Matilda の語りからはその絶望の理由が読者にはわかりづらい構造になっている。つまり、本作品の後半部で描かれる Matilda の絶望と、作品前半部における父親の愛の告白に続く自殺との間には物語上の飛躍があるのだ。さらに、作品後半部で描かれる Matilda の言動には利己的で頑なすぎる面が目立ち、読者はその絶望の表現から感傷的で大仰すぎる印象を受ける。そうすると、このような主人公の絶望感が作品後半の紙面を大きく割いて描かれていることからも、読者は主人公の語りに辟易してしまう可能性が高い。Godwin が Matilda の絶望の描写を本作品の欠陥として批判し、それを主な理由として作品出版を禁じたのも、当然である。しかし、Mary は作品の半分を Matilda の絶望の描写に割いている。Matilda の絶望の描写に文学的意味を見出すことはできないだろうか。

マチルダの罪－自作自演に対する罪の意識か？

批評家の Robinson や Bunnel が本小説における劇の特質を読み解こうとしたように、Matilda の一連の物語は自作自演の「悲劇」なのではと思わせる側面がある(Robinson 80; Bunnel 85)。Matilda の中に、自分の人生舞台を演出してその役を演じる女優の側面があるとすると、父親との関係やその自殺後に陥る彼女の絶望にも計算高い演技があるのではと考えたくなる。つまり、彼女は父親に対して禁断の愛情を抱き、父親の気持ちには気づかぬふりをしながら父親を誘惑した、したたかな娘ではないか—しかし、父親が告白するや彼女がそれを拒絶したため、父親がそれを苦に自殺をしたのではないか、作品後半部で連綿と続く Matilda の絶望を引き起こした本当の理由はこれではないか—といった見方をしたくなる。しかしながら、マチルダは父親の禁断の愛には強い嫌悪感と恐怖を示している。そうすると Mary に Matilda を、父親を意図的に誘惑する娘として描く意図があったと考えるのは難しいように思われる。とは言え、Matilda の絶望の理由を、自分が父の告白を無意識のうちに誘導してしまったことを悔やむ思いに帰してしまうのは、根拠としては弱すぎないだろうか。

マチルダの孤独

Matilda は自分の罪の意識を次のように説明する。「自分が引き起こした不自然な愛、つまり父親が抱いた禁断の愛によって、私は汚れてしまったと思う」(*Matilda* 60)。つまり、本作品では Matilda は禁断の愛を抱いた

父親を弾劾せず、無意識のうちに父親に禁断の愛を抱かせてしまったおのれに恐ろしい罪があるとして自らを断罪している。そして、その罪の源泉をおのれ自身に設定することで、彼女の罪の意識は社会から認められず、罪を贖うチャンスもなく、一人で抱え向き合い苦しまなければならない。彼女は名もなき罪を背負う「怪物」である(*Matilda* 61)。ここに Mary が本小説で描こうとした問題意識が隠されている。ここから連想されるのはメアリの第一作目 *Frankenstein* における怪物である。怪物はその容姿のせいで作り手からも社会からも存在を容認されず、不満から利己心すなわちエゴを育ててしまい殺人を犯す。Matilda もまた名もなき罪の意識を持って社会から孤立し、孤独な生活から利己心を強めていく。*Frankenstein* の怪物は容姿の醜さゆえの孤立に苦しむが、*Matilda* においては主人公の存在そのものが父親の心に罪の愛を引き起こし、社会から隔絶されるべき忌まわしい存在へと至らしめた設定となっており、第一作目よりも孤立の内実と主人公の絶望感をより深く、かつ根源的な人間の存在の問題にまで掘り下げている点で評価できるだろう。孤独と孤独から引き出される利己心のような人間の負の感情が Mary の問題意識であるとすれば、彼女はなぜ近親相姦のモチーフと絡めてこの問題を描いたのか疑問が残る。

理由のひとつには当時の Mary と Godwin の関係が考えられる。Mary は Godwin の反対を押し切り、Percy Bysshe Shelley と駆け落ちしたため Mary と Godwin の関係は悪化していた。当時の Mary にとって夫との関係性も良好ではなかったにしても、夫は彼女の傍にいて文筆活動を行う仲間ではあった。しかし、父 Godwin は Mary にとって言わば失われた存在も同然だった 。Matilda の父には妻の死後娘を置いて家を出る無責任な側面があり、妻の死後子どものことを考えて後妻を迎えた現実主義の Godwin とは似てもにつかない。しかし、Mary が失った父親を希求するという着想を自分の現実から得て作品に反映させたとしてもそれほど不思議はない。もうひとつの側面は、Mary が近親相姦のモチーフについてロマン派の伝統を意識していたと考えられる。ロマン派においてきょうだい間もしくは疑似きょうだい同士の近親相姦が繰り返し作品で表象されている。例えば、Byron の劇詩 *Manfred*、Pecy Bysshe Shelley の長編詩 *Laon and Cythna* のほかに、Mary の *Frankenstein* における博士と婚約者の Elizabeth の関係も疑似きょうだいにカウントできる。こういった近親者の恋人は死に別れるのが常套のプロットだが、子供時代からきょうだい間で培われるのは理想的な共感の絆である(Richardson 743-44)。このあたりのロマン派的伝統を Mary が意識したとすると、Matilda の愛は精神的結びつきを希求するプラトニックな性質を帯びていると解釈することができる。それゆえ父の存在にあれほど拘り、自らを父の禁断の愛を招いた不浄な存在として深く絶望していたのである。そして、父の Matilda に対する禁断の愛を性愛とすれば、ふたりの愛はこの地上では決して相容れず、両者の間に共感の絆は生まれない。Matilda と父が死に別れる点ではロマン派作品で描かれるきょうだい間の近親相姦と同じプロットだが、地上で両者の愛はかみ合わず相手への共感も生まれない点で、Mary は *Matilda* においてロマン派が理想として描く近親者同士の愛と共感を挫折させて描いた。Mary の長編小説 *Valperga* や後期作品の *The Last Man* はロマン派的理想の挫折を描いているが、この特質が第二作目の小説 *Matilda* にも既に表れている。物語の最後まで Woodville は Matilda の絶望に辛抱強く付き合う理想の友人ではあるが、Matilda に希望を持たせ再生へ向かわせることはできない。近親者ではない Woodville と Matilda の関係性さえも挫折させてしまうのが、Matilda の父への愛のもたらす悲劇である。

*書名および登場人物名のマチルダにはスペル表記が 2 パターンあるが、本稿における表記は基本的に Clemit 版に従い、その他の引用文献についてはその原文表記に従った。

Works Cited

Bunnell, Charlene E. "*Mathilda*: Mary Shelley's Romantic Tragedy." *Keats-Shelley Journal* 46 (1997): 75-96.

Garrett, Margaret Davenport. "Writing and Re-Writing Incest in Mary Shelley's *Mathilda*" *Keats-Shelley Journal* 45 (1996): 44-60.

Richardson, Alan. "The Dangers of Sympathy: Sibling Incest in English Romantic Poetry." *Studies in English Literature, 1500-1900*, 25 (1985): 737–54.

Robinson, Charles E. "Mathilda as Dramatic Actress" *Mary Shelley in Her Times*. Eds. Betty T. Bennett and Stuart Curran. Baltimore: Johns Hopkins UP, 2000, 76-87.

Shelley, Mary. "Matilda." *The Novels and Selected Works of Mary Shelley*. Ed. Pamela Clemit. Vol. 2. London: Routledge, 2016. 5-67.